自由な表現 海越えて

岡山や広島、中国の障害児ら

4年ぶり 上海で絵画展開幕

日中の子どもたちが自由な発想で描く作品が展示された友好絵画展「きらめきは海を越えて2024」＝中国・上海市

岡山、広島など6県と中国・上海市の障害児、児童福祉施設利用者らによる友好絵画展「きらめきは海を越えて2024」（社会福祉法人旭川荘、みその児童福祉会、上海市人民対外友好協会主催）が31日、同市で12日までの日程で開幕した。2019、20年に開催した後、新型コロナウイルス禍による休止を経て多文化共生と福祉への理解をテーマに4年ぶりの再開。来場者は自由な発想で描かれた子どもたちの作品92点に見入った。

会場は上海市中心部にあり、高梁市出身の洋画家児島虎次郎と交流のあった文人画家呉昌碩を顕彰するホール。開幕式には岡山市日中友好協会、上海市民政局のほか、地元の教育関係者ら約60人が出席した。旭川荘の神崎晋理事長、上海市人民対外友好協会の傅継紅副会長、在上海総領事館の竹中恵一副総領事があいさつで「子どもたちの絵画は国や障害の有無を超越している。日中の子どもたちの交流促進につながってほしい」と述べ、関係者でテープカットした。

水彩画やクレヨン、粘土などを使った出品作は、障害者アートに力を入れる旭川荘（岡山市北区祇園）、子どもの発達と地域連携にアートを活用するみその児童福祉会（同天神町）が岡山、広島、鳥取、島根、高知、愛知県で運営する児童養護施設、乳児院、保育所など12園の利用者から計42点。上海市側は日本の特別支援学校に当たる施設や日本人学校などから寄せられた50点を展示した。

大切な友達、大好きな職員を描いた絵をはじめ、電車、こいのぼり、花などを感じたままに自由に表現しており、来場者からは「心のままに描いた作品に感動する。アートには境がないことが分かる」といった声が上がった。

旭川荘は約40年間、上海の高齢者、障害者福祉の支援を続けているほか、日本の障害者がチャーター機で上海を訪れる訪中団「福祉の翼」を1990～2009年に派遣するなど交流している。友好絵画展の作品は11月、倉敷市内でも展示される予定。（江草明彦）

©山陽新聞社　無断複製転載を禁じます。